

文化財を訪ねて

―見てある記―

「まちの職人と太子講」

1月22日、浄土宗清水山浄念寺の境内にある太子堂へ人びとが集まります。これは、「太子講」という大工や左官といった職人たちが集まり、飲食をともにしながら聖徳太子をまつる信仰のことです。

太子講とは、聖徳太子の忌日に行われる法要のことです。奈良県にある法隆寺や四天王寺では、現在も「聖霊会」と呼ばれる大規模な法要が行われています。

日本では、古来より職業や生業に応じて様々な神が信仰されてきました。海外、特にキリスト教を信仰している地域でも、職業ごとに守護聖人が存在しており、彼らを崇拝する文化が今も残されています。

なぜ、職人たちの間で聖徳太子が信仰されていたのかは、はっきりしていませんが、法隆寺や四天王寺などを建築したからとされています。また、一説には工具の一つである差金（曲尺）を聖徳太子が発明したからとも言われています。

職人たちによる太子講は、江戸時代に始まったとされ、一般的には聖徳太子の忌日である2月22日に行われていましたが、地域によって時期は異なり、1月や5月、もしくは9月の22日などにも行われていました。江戸時代の大工は、地域の大工組に所属して組の規約に従って仕事を行っていました。太子講の集まりは、信仰の場に加えて大工組内部での話し合いや懇親の場でもありました。

明治時代に入り、新たな建築技術や法律が登場してくると、大工組はそれらに適応する中で大工の組合へと変化していくこととなりますが、太子講の文化は引き続き行われていきました。

桶川でも、昭和のはじめに大工や建具師をはじめとするまちの職人たちの間で「職工組合」が組織されました。

当時から桶川の太子講では、1月22日に組合の代表数名が浄念寺を訪れ太子堂の地代を支払い、住職に拜んでもらっています。浄念寺の太子堂には、江戸時代初期に作られた木製と石製の聖徳太子像が安置されています。その後、組合員は浄念寺近くのお店に集まります。そこでは、

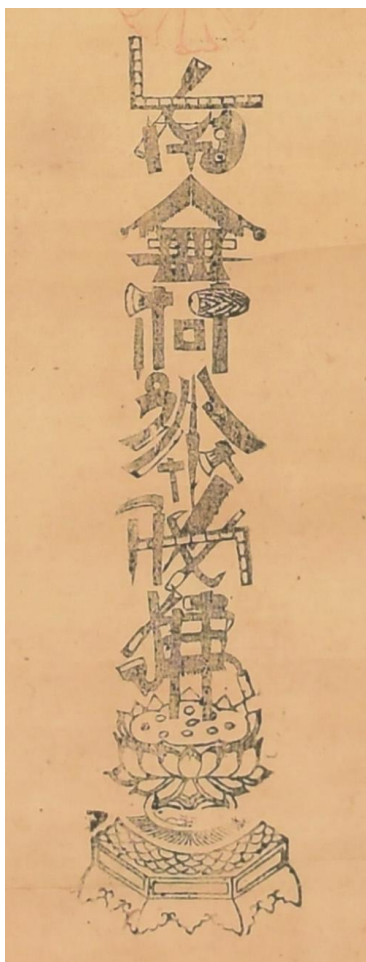
掛軸をかけて、みかんを供え、皆で線香を立てたそうです。写真の掛軸は、職工組合の時から使用されている「南無阿弥陀仏」の漢字が差金やノミといった職人の道具で表現されており、職人たちの厚い信仰をうかがい知ることができます。

また、太子講は新しい職人を紹介する場でもありました。親方が組合

川西支部の人びとによって市内の太子講は続けられています。

浄念寺や太子堂については、歴史民俗資料館が活用しているアプリ「にっぽん風景なび」でも見られます。

アプリでの閲覧は、スマートフォンなどの情報端末で二次元コードを読み取り、「にっぽん風景なびアプリ」をダウンロード後、「地域を選



桶川の太子講で使用される掛軸
(歴史民俗資料館収蔵、部分抜粋)

員の前で一人前となった弟子職人を紹介します。弟子は、一升瓶を持参して組合員たちと飲食をともにすることです。

一人で一人前と認められ、まちの職人として仲間を迎え入れられました。その後、その年の職種ごとの日当についての相談や仕事の近況報告、大きな仕事の請負について、お酒を飲みながら語り合う場だったそうです。現在でも、建設埼玉桶川支部と桶

ぶ」から「埼玉県桶川市」を選択してください。

※アプリのダウンロードは無料ですが、通信費用は利用者負担となります。

詳しくは

課 ☎786・4009、

または歴史民俗資料

館 ☎786・4030



Android



iOS